

---

# とあるリリカルな転生者

トーマ&リリィ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とあるリリカルな転生者

### 【ΖΖコード】

Ζ6945X

### 【作者名】

トーマ&amp;・リリイ

### 【あらすじ】

自称偽善者の少年は子供を助けるために死んでしまった

それを見ていた、神様によつてリリカルな世界に転生をすることに！

色々な能力をもつた少年は一体どんな物語を織り成すのか

これは処女作です。下手なので、いろいろ教えてください

## プロローグ

「ふあ～～、いい天気だな」

朝、いつもの様にベッドから起きた俺はカーテンを開けて呟いた。

「今日は、何をするかな？・・・・そうだ、確か今日は、集めてる漫画の発売日だなあ… よし、買いにでも行くか」

本を買いに行くことにした俺は、朝ごはんを食べて家を出発した。

「それにしても、今日はホントに、いい天気だな。こんな日は何か良いことでもあるかもな。」

本屋に着いた俺は、本を買って家に帰ろうと歩いていて、ふと道路を見たら、ボールを追いかけてきた子供が道路に飛び出していた。

「なっ、あ、危ねえ！」

見てみると、車が向こう側から突っ込んでくる。このままじゃ、あの子供は死んでしまう！

気づいたときには体が動き出していた。そして、道路に飛び出して子供を突飛ばした、そこで彼の意識はなくなつた

## プロローグ2（前書き）

いや～もうすぐだけビネタがなくなりました…  
まだプロローグは続きます。

## プロローグ2

「ん、ここのまゝ…ビニード?」

気が付くと、俺は真っ白な空間にいた。

とてもなく広い空間なのか、白い空間は見渡す限り何処までも続いていた。

「まあ、いつかどこでもいいしとりあえず寝たいから寝るか」と言つて俺は寝ようとしたら…

「おい、起きろアホ」

とこきなり罵倒されながら起された。

俺は起された方を見ると、見知らぬ幼女がいた。

「…・誰だ?あんた」

と俺は幼女にたずねた。

「ん?私か?私は…・・・神だ」と言つて俺を見てきた。  
(なんて・・・痛々しい子供なんだ。)

と俺が思ついたら

ゴンシ

「痛つてええええ!」

「痛々しいとか言うからだ!」

(な、何でだ?何でこいつ俺が考へることが分かつたんだ?それに、今の一撃もなんて重く鋭い一撃なんだ、もしかして幼女ではなく幼女の皮を被つたゴリラなのか?)

「私はゴリラなんかじゃない!」

(まだ、俺の考へることが向ひて筒抜けだ…・・・まさか本当に神なのか?)

「だから、私は神だと言つてるでしょ」

と（自称）神は自信満々に俺に向かって言つてきた。

## プロローグ2（後書き）

・・・すみません、もう一回まだ、プロローグは終わりません。プロローグは多分次ぐらいで終わるかと思います

## プロローグ（前書き）

今回の話は結構無理やり感があります、すみません（――）  
それではどうぞ

## プロローグ③

「ふうん、どうやら本当に神のようだな・・・一つ聞いていいか？」

「やつと話が進む・・・いいわよ。」

と神から了承を得た俺は、一つ気になることを聞いてみた。

「確か、俺は車に引かれそうだった子供を突飛ばしたはずだあの子は無事か？」

「ええ、無事よ その代わりにあなたは死んでしまったけれどね」

「良かった・・・あの子供が助かって、それだけが気になってたんだ。よし気になつてた事は聞けたし、天国か地獄か知らんが、はやく逝かしてくれ」

「ふふ、あなたはお人好しね、後あなた天国にも地獄にも逝けないわよ」

「はあ？何でだよ、もしかしてこの真っ白で何もない空間にずっと居るとい？」 「違うわよ、あなたは転生するのよ」

（――）？ん・・・・（――）ええええええええええええええええええ！

そんなことが実際にあるの？こんなこと一次創作でしか無いと思つていたのに。

「ねえ、落ち着いて、お願ひだから、落ち着いて頂戴、話が進まな

いでしょー

数分後

「はあはあ、や、やつと落ち着いたみたいね」

「はい・・・落ち着きました」

「で、あなたが転生する世界だけ?」「ちよつと待て」・・・何よ?  
「何で俺が転生するんだ?よくわからないけど、転生なんてことを  
するなら理由があるだろ?」

「それは・・・実はあなたが助けた子供はあの車にほほ確實に死ぬ  
予定だったの、でもあなたは自分の人生を潰してまであの子供を助  
けた、それにあなたの人生は良いことしたわりに、不幸なことばか  
りで可哀想だつたからよ」

「そつか・・・といろでどこの世界に転生するんだ?」

「あなたには『リリカルなのは』の世界に逝つてもううわ

「・・・『リリカルなのは』か・・・いろいろやりたいから、なん  
か能力とかくれるか?それと原作を破壊したいけどいいか?後『い  
く』の字が違うぞ」

「ふふ、優しいのね?原作については壊してもいいわ、行つてもら  
う世界は『リリカルなのは』の世界に限り無く近い平行世界だから、

能力はあなたが欲しいのを言つて頂戴」

「ありがとう、別に優しいわけじゃないさ、ただの自己満足さ・・・

「

（そりゃ、あの時だつて俺の自己満足のせいであいつは・・・くそつ過去を後悔しないつて決めたんだ、今さら後悔してビリするんだ・・・）

「そう?まあいいわ、能力はなにする?」

「じゃあ、金色のガッシュに出でくる呪文、アンサーートーカーの能力、ドラクエとテイルズに出でくる魔法も頼む」

「分かつたわ、後私の好みの能力もつけとくわ」

「そりゃ・・・ありがとう

「ガッシュの呪文、テイルズとドラクエの呪文はあなたの魔力を媒体にして使うからね、魔力に関しては、あなたの生前のリンクキャラを使うから」

「おい、ちょっと待て、今リンクキャラって言つたな?俺にリンクキャラなんて有つたのか?」

「ええ、有るわよ、しかもあなたどんでもない魔力を持っているわよ

「だつたら、なぜ俺は前世で魔法が使えなかつたんだ?」

「それは、あなたの世界が魔法を認めなかつたからよ、魔法が世界から認められなかつたら魔法が有つても魔法は使えないわ、大体魔法があるなんて知らなかつたでしょ?」

「確かにそうだな・・・分かった・・・よし、じゃあそれから連れ  
てってくれ」

「待つて、まだデバイスとあなたの名前を決めてないわ」

「そうだったな、じゃあデバイスはユーニゾンデバイスで頼む」

「分かったわ、名前はどうする?..」

「名前はあんたが決めてくれ」

「分かったわ、じゃあそろそろ行へ?..?」

「ああ、もうすぐるよ」

「そう、じゃあ逝ってらっしゃい」

「え、ちょっとまって・・・うわっ!..」

そういうと突然、俺のいた場所の真下に穴が出来て、俺は落ちてい  
った

「はあ、やれやれ」

## プロローグ③（後書き）

えっと、アンケート？というか主人公の名前とデバイスの名前を募集しています・・・後ご意見や感想また、指摘や誤字の訂正などをしてくれるとありがたいです これからも、よろしくです

## 現状の確認と意外な事実？（前書き）

遅れました、第4話です、どうぞ

## 現状の確認と意外な事実？

「ん、」「は・・・」

気が付くと、俺は青空を見ていた

「あ、起きた」

声が聞こえた方を見ると、黒い綺麗な髪の女人がいた。

「・・・は？誰だ？お前」

「私はあなたのデバイスのソラよ」

(・ー・) Hツ ・・? HHH (」。 。 ) 「 HHH

勝手に決めといつてとは言つたけど、まさか人型デバイスだと――！  
？

「あつ、そつそつあなた宛に手紙がポケットに入つてたから渡すわ」と言つて手紙を渡してきたソラから手紙を受け取つた俺はさつそく読んでみた

「あなたが手紙を読んでいるといつことは、無事に送れたみたいね、えつとあなたはソラと二人暮らしつて言つことになつてゐるから、後お金は手紙の中に通帳が入つてゐるからその中にあるわ、後家の住所も入つてるわ・・・まあこのくらいかしら？」  
あ、そういうあなたの年齢は5才つて事になつてゐるからね、ちなみ

に送った時代は・・・な忘れたわ、他に聞きたいことが有つたら、電話してね」

・・・まあ、なんつか適當だな・・・手紙を読んだ俺の感想はそんなかんじだつた

ていうか、俺の見た目5才か・・・といふことは小学生からやり直しかな? 送った時代がわからないのはキツいな・・・

あつそれより手紙の中をチェックしなきゃ

手紙の中を見てみると、家の住所と神様のメアドと電話番号、通帳が入つっていた・・・

さつそく通帳の中身を見た俺は驚いた、なんなんだ? この果てしない金額は・・・こんだけありやあ、一生遊んで暮らせるだろ・・・

まあいいか、ないよりはあつたほうがましか  
とつ考えてたらいつの間にか、俺の前にいたソラが

「これからよろしくね、妹ちゃん」

と言つた・・・

## 現状の確認と意外な事実？（後書き）

あ——主人公の名前が決まらない  
というわけで、まだ主人公の名前を募集しています、主人公の名前は  
要望が無い場合は、友達と考えます

**前世の名前を名乗ると人は後悔する（前書き）**

主人公の名前を友達と考えてやつと決まりました！（。。）  
後連れてすみません、ではどうぞ

前世の名前を名乗ると人は後悔する

・・・はい？今「マイツは何て言つた？

「これからよろしくね、妹ちゃん」

だと、まさか俺に言つたのか？

（でも俺は男だしな・・誰に言つたんだ？

一応俺がどうかの確認しつくか）

「おーい、妹って誰の事だ？まさか、俺の「とじやないだるうな？」

「へ？あなたの事よ」

「は？俺のビートを見れば女と間違えるんだ？」

（マイツは句を言つてるんだ、俺は男だといつのこと）

「うーん、あなたの顔や体つきから女の子つて判断したんだけど・・もしかして、違ったかしら？」

（・・・顔や体つきから判断したとか言つたよなのははずだ・・・）

「せつあ、顔や体つきから判断したとか言つたよな

「ええ」「俺の顔はどう見たつて男のはずだ、それなのに、なぜ間違えるんだ？」

と俺が言つとソラは驚いたような顔をしていた…そんな変な事を言ったか俺？

「はあ、『氣づいてないの?』『ほら、鏡を見なさい』

と言つてソラは俺に鏡を渡してきた

「鏡を見たつてどうせ何も変わつてなー!?」

鏡を見た俺は驚いた、そこに『写つ』ていたのは俺の顔ではなく黒い髪の毛をした女の子がいたからだ

「お、おこいこいこいつているのは…まさか俺か?」

「やうよ、妹ちゃん以外に誰が写つてているのよ」

(まさか年齢だけでなく顔まで変わつているなんてな…『どうしよう!』男の娘なんて現実にいるなんてな、しかもそれが俺だなんて…。はあ~やだな)「まあ、顔と体つきが女なのはいいがそれでも俺は男だ、だから妹ちゃんなんて呼ぶなよ」

「わかったわよ、じゃあ、名前で呼ぶわ」

(よじこれで妹ちゃんなんて呼ばれないな )

「・・・よく考えたら私名前を知らないわ、ねえ名前を教えて?」

(あつ名前か~そういうえば、言つてなかつたな…。  
あれ?俺の名前つて前世のやつを使えばいいのか?それとも新しい名前とか手紙に書いてあつたかな?)  
あつそく俺は手紙を見てみたが名前なんて書いていなかつた。どうしようかな?

「まだ名前教えてくれないの？」

(まあ、前世の名前でいいか)

「あ～俺の名前は朝霧葵だ。これからよろしくな」

ソ「・・・」

葵「ん～どうした?ソラ」

ソ「あはは、あなた顔だけでなく名前まで女の子みたいね」

葵「それを言つなあああ

くも、その名前のせいによくからかわれたから違う名前を名のうと  
くんだった

ソ「そんなに怒らないで、そろそろ一回家に行つてみない?」

葵「ちひ話をそらしたな・・・まあ良こじやあ行くか

神からの手紙に入つていた地図を見ながら俺とソラは家に向かつて  
いった

**前世の名前を名乗ると人は後悔する（後書き）**

遅れたわりに文が短くてもし期待している人がいたらすみません、  
がんばつて1週間に一回は投稿するようにします

## 豚と葵の料理の実力（前書き）

物語が進まない  
原作キャラにはこつ合へるんだろう  
それではどうぞ

## 家と葵の料理の実力

葵「これはあり得ないだろ」

家に着いた俺の最初の言葉はそれだつた  
えつ？何であり得ないかだつて？  
だつて・・・

葵「大きすぎだらおおおおおおー！」

ソ「ど、どうしたの？急に叫んで」

葵「いやいや、これはいくらなんでも大きすぎだろ、だつてこれら  
一入つきりで生活するにはどう考えても大きいだろ」

ソ「葵と一入つきりでの生活・・・ボンッ／＼／＼

えつ？そんなに大きいかだつて？

考へてもみるこれから隣でいきなりキャラ崩壊してのソラと一人で  
生活するのに、周りの家より2、3倍大きな家つてあり得ないだろ？  
ていうか、ソラのやついきなり顔を真っ赤にして・・・風邪か？

葵「まあ、いいか。おいソラとにかく一回家に入るぞ」

ソ「あつ、う、うん」

あれ？そういうえば鍵持つてないけど何処にあるんだ？と門（といつ  
てもそんなに大きくない）を通つた俺は思つていた

葵「だから、あり得ないだろ」

またまた同じような発言をした俺えつ？また何で同じようなことをいつたかって？だってよ

葵「指紋認証で家が開くってどんだけだよ、下手するとオーバーケノロジーだろ」

ソ「どうしたの？早く家に入らないの？」

葵「ああ、もう疲れたから入ろうつか・・・」

と言つて家に入つてみたわけだが・・・

ソ「せひそく家の中を探検してしょー」

とほしゃいでのんびりと探検する事に・・・

俺疲れてたつて言つたよな？

～家中探検中～

葵「つ、疲れた」

今俺はリビングのソファーの上でぐつたりしている  
なんと驚け、家が広すぎる上に隠し部屋まであるせいで、昼前には  
家に着いていたはずだが、今はもう夕陽が窓から家に射してきている

葵「あー一家が大きいのも考え方のだな、疲れたからしばらくなんびりするか」

と俺がのんびりしようとていたら、ソファーで寝つじうがつているソラが

ソ「ねえ、葵、疲れたし、お腹減ったよ、なんか作つて~」  
と黙々子のようになつている  
くそつ誰のせいで疲れたと思つてるんだ  
しうがない疲れてるけど、ご飯を作るか  
キッチンに行つて冷蔵庫の中を見た俺は

葵「おつ 意外と色々入つてゐるな これなら、少しだけ明日買いに  
いけば良いな、そうだな・・・おーい何が食いたい?」

ソ「葵の作れるもので良いよ、どうせチャーハンとかでしょ」

葵「ふつ甘く見たな、お前の考えが甘い」と見せてやる

しかし、何を作ろう・・・パスタがあるからパスタかな  
よし、海鮮パスタにするか

葵「できたーよし後最後にパセリをのせて出来上がり」

ソ「葵～料理できたら～？」

葵「ああ、出来たぞ～じゃあ食べるか」

俺が料理が出来たと聞くとテーブルに座つて待つている

葵「それじゃあ」

葵ソ「～いただきま～す～」

ソ「・・・」

葵「ん～どうしたソラ～？美味しくなかつたか？」

そう、ソラが料理を食べはじめてから一回の喋つていないので

葵「味付け間違えたかな？」

ソ「お～～」

葵「お～？」

ソ「おいしい～～す～」～よ葵「～んなに美味しいなんて私思わなかつたよ～」

葵「そ、そつか」

どうやら、味付けは間違つてなかつたらしき味もお氣に召したらし

い、でも何で黙つてたんだ？

ソ「でも、」こんなに美味しいと女として負けた気が・・・。」  
美味しいと言つて上機嫌で食べてたら、急に落ち込んだな・・・。何  
故だ？

## 葵と葵の料理の実力（後書き）

作者「せつやくフラグを建てたか……」

葵「フラグってなんのことだ？」

作者「……鈍感だな」

作者「てこつか、ソラはこの辺が好きなんだ？」

ソラ「可愛じひとひかなかな／＼」

葵「ん？ソラ、やっぱつお前風邪か？」

作者「……がんばれよソラ」

ソラ「……はい頑張ります」

葵「おいなんなんだよ、おこ」

作者「え～！んなぐだぐだな感じですが次回もよろしくお願ひします」

葵「ちよつ勝手に終わるな、説明しきりまあまあとー。」

能力の確認とシンテールの女の子との遭遇？（前書き）

一つ疑問なんですが、なのはのお父さんの入院してた時期つて小学生に入る前で合ってますかね？

それではどうぞ

## 能力の確認とソインテールの女の子との遭遇？

あの後、風呂に入ろうとしてたらソラが一緒に入ろうと言つてきて、全力でそれを防いだり、やたらくつついでくるのを防いだり、一緒に寝るのを防ごうとしたり（防ぎきれなかつた）して疲れたしかし、何故疲れたんだ？

作者「ソラのせいだろw」

ん？今謎の電波が飛んできたよ？

あつ今俺は神にもらつた能力の確認のためにソラと一緒に近くの山に来ています

ソラ「じゃあ結界をはるよー」

葵「わかつた」

まずは何の能力を試すかな・・・  
いや、まずは魔力の量でも測るか

葵「ソラ俺の魔力量を測つてくれないか？」

そう普段はダメな感じなソラだが実は無駄に廃スペックなデバイスなので、魔力量を測るなんて朝飯前らしい

ソ「えっと、葵の魔力量はA+くらいね」

葵「それってすごいのか？」

あれつ、神がとんでもない魔力って言つてたけど、原作キャラ達の魔力量ってA A Aランクくらいあつた気がするから・・・そんなに多くなくなないか？

ソ「うん、だいぶスゴいよこれだけあれば余程の敵でない限り魔力が切れるなんてことはないよ」

葵「ふうん、まあ魔力はそんなに気にしないけど、まずは色々な呪文を使ってみるか」

葵「・・・ザケルガ」

力をイメージして呪文を唱えた瞬間、手から貫通力のある雷の閃光がでて近くの木を貫いていった

葵「・・・ザケルガでこの威力とか・・・これがバオウザケルガだとどうなるんだよ」

ソ「今の技中々すごい技ね」

葵「でも追尾性能も無いから威力と攻撃距離だけだぞ」

ソ「そうだけど、威力の割に魔力消費量がとても少ないから結構な回数使えるよ」

葵「ふうんそなんだ、次は何の技に使用かな・・・よし決めた」

葵「・・・ジゴティーン！」

黒い雷をイメージして唱えると、莫大な質量を持つた雷が現れ、結界内を全て黒焦げにしていった

葵「・・・凄いな」

ソ「確かにものすごい威力ね、それにこれって非殺傷設定でしょ？葵が殺傷設定のまま技の練習なんてしないと思つてたし、それより今の技すごいけど魔力消費量がとても多いでしょ？葵の魔力量じゃあそんなに使えなわ、魔力消費して疲れたでしょ？休憩しよ？」

葵「ん？別に疲れてないけど？」

ソ「そんなはずあるわけ・・・！？」

葵「どうした？」

ソ「いえ、何でもないわ、疲れてないなら技の確認の続きをしましょうか？」

ソラ side

おかしい、葵の魔力量でさつきの技を使つたら魔力の大半を持ってかかる筈なのに・・・どうこうことかな？

葵「ソララ、技の確認の続きを早くしよ？」

ソ「あ、うん」

まあそのことはまた今度でいいか

（ソラ side out）

いや～疲れたな、それにしても神のやつまさかとある系の技が使えるなんてな、超電磁砲が撃てるなんて凄いな、まあ能力を使いすぎると頭が痛くなるのが超能力の欠点か・・・

それでも、ソラやつなにが

「私疲れたから先に帰るね、後帰りにアイス買ってね  
だよ全く・・・」

俺がアイスを買うためにコンビニに行こうと公園の前を通り過ぎようとしたら、泣いている声が聞こえたので俺が公園の方を見てみると、悲しそうな顔をしたツインテールの女の子がいた

葵「どうなってるんだ、こんな話知らねえよ・・・」

能力の確認とシンテールの女の手との遭遇？（後書き）

作者「使えるよ技多いな」

葵「お前が決めたんだろ」

作者「いや俺だけじゃねえよ決めたの」

葵「じゃあ誰と決めたんだよ？」

作者「友達と決めたんだよ」

葵「お前友達いたのか」

作者「い、いるよ、6人くらいわ」

葵「うわ、すくなっ」

作者「少ないとか言つなよ……」

葵「いろんな作者ほつといつかなあ？ソラ」

ソ「やつと出番きた……（ト・ト）」

葵「あーもういい、今回もダメ作者のせいでぐだぐただけどこれからも直しくな」

作者「ダメ作者って……」

葵ソ「つれつー！」

## 子供を一人にさせるな！（前書き）

初めての感想を頂きとても嬉しかったです  
今回の話は今まで一番長いです、それではどうぞ！

## 子供を一人にさせるな！

前回のあらすじ

能力の確認 帰り道に公園でツインテールの女の子発見

葵「関わらんぢうかなか？」

葵は最初関わらないことにしようと思つた、しかし泣いてる顔を見ると

葵「・・・やっぱり俺は偽善者なのかな、人の泣いてる顔なんか見たくないや」

と言つと葵はツインテールの女の子の前に立ち

葵「こりにちは、泣いてるけど大丈夫か？」  
と言つた

るのは side

私は一人で公園に居るの、遊んでくれる友達も居ないからとても寂しいの

公園に居た他の子も皆家族と遊んで帰つていったの、でも私には遊んでくれる家族は居ないので、迎えにも来てくれないので、お父さんが入院しちゃってお母さんたちはお店に忙しいのだから、私はいいこにしてないといけないの

そう思つていたらとつても悲しくなつて目から涙が出てきちゃうの、一日出でてしまつた止まらなくなつて泣いていたら

「こんにちは、泣いてるけど大丈夫か？」

知らない女の子に話しかけられたの

るのは side outs

勢いで話しかけちゃったけど俺やばくね？知らない人に話しかられるとか怖いよ

あれもしかして

泣いてる女の子に話しかける 知らない人から見ると男の人人が女子を泣かしてる 犯罪の匂い 通報 逮捕じゃないか？・・・もしかして終わつた？

と一人で考えていたら

「あのー大丈夫ですか？」

と言われた

あつこつちが心配されちゃつたよ

葵「ああ大丈夫だよ、それより君こそ泣いていたけど大丈夫なのか？」

そう俺が気になつたのは何でもう薄暗くなつてきた公園に一人で泣いていたかということだ、親とか友達とかいないのか？

「だ、大丈夫です。後泣いてなんかいませんから、心配しないでく

ださい」「

葵「はあ、涙田で言われても説得力ねえよ、ほりまづはこれで涙を拭け」

と俺はハンカチを目の前の女の子に渡した

「あ、ありがとうなの」「

とハンカチを受け取った女の子に俺は

葵「それにしても、お前一人か？親、というか家族や友達はいないのか？」

と俺が言つと

「家族・・・う、うわああああああん

突然泣きながら抱きついてきた  
突然のことと焦つたけど

葵「なにがあるか知らないけど、今はおもいつきり泣いとけ」

と言つて泣いてる女の子を受け止めていた

「なのはs.i.d.e」

家族のことを言われた、私はとても悲しくなつて思わず、抱きつい

て泣いてしまった、すぐに離れようと抱きついていた

「なにがあるか知らないけど、今はおもこつせり泣こじた」

と言われて、泣き止むまでずっと抱きついていた

「なのはside outへ

～数分後～

葵「落ち着いたか？」

「うん落ち着いたの、ありがとうなの」

葵「いや別に、俺は何にもしてないよ」

「そんなことないなの、私とつても嬉しかったの本当にありがとうなの、えつと……」

葵「どうしたの？」

「あいつその名前がわからなくて」

葵「あいつやつこえれば言つてなかつたね、俺の名前は葵、朝霧葵だ宜しくな」

「私の名前はなのは、高町なのはよみじくんなの葵ちゃん」

葵「ああ宜しくな、なのは後俺は男だからな（・。・。）」

な「ふええええええええええ！」？」

（また数分後）

葵「落ち着いたか？」

な「落ち着いたな」

葵「じゃあ聞くぞ、何でこんな薄暗くなつた公園に一人泣いていたんだ？」

な「そ、それは・・・」

葵「あー言いたくなかったら言わなくても「い、言ひのー」そ、そ  
うか」

な「お父さんが入院しちゃって、お母さんやお兄ちゃんたちはお店  
が忙しくて、だから構ってくれなくて、でも遊びたくてでもなのは  
は良い子にしなやいけなくて・・・」

そういう事か、なのはの父親が入院してなのはの家族は忙しくなつ  
て、だからなのはまだ親に甘えたい年頃なのに一人で泣いていた  
のか・・・

葵「よし、おいなのは！」

な「ふえ？」

葵「俺がお前の友達になつてやるー！」

「なのは side

「俺がお前の友達になつてやるー！」

私はこの言葉を聞いた瞬間とつても嬉しかったの、だつてずっと一人でいて寂しかった私と友達になつてくれるつてことだから、だから私は

な「うん、よろしくなの 」

とても笑顔で返事ができたはずなの

「なのは side out」

な「うん、よろしくなの 」

俺はこの言葉を聞いて安心した、もしこれで迷惑がかかるからとか  
言って、断つたら、年の割にすごく大人になつてしまつた・・・いや  
やならざるなかつたかな?とにかく、まだ子供で良かつたと思う、  
だつて悲しいじゃないか、何かしらの温かみのない幼少時代なんて・  
・まあこれも俺のエゴなのかも知れないけどな・・・

葵「よし、じゃあ明日から遊ばうなー。」

と俺が叫び

な「えつ今から遊ばないの?」シヨン

と落り込んでしまった

葵「遊んでもいこねー、お前そろそろ帰らなくっていいのか?」

そ、なのはと会つた時が夕方だったから、それからだいぶ時間が経つて今はもう暗くなっている

な「あつ もつ真つ暗だ・・・暗歸つてきてるなの、怒りやけりやうかもなの」

葵「はあ、しようがねえ付いていつてやるよ」

まあ、暗くなるまで公園にいたのも俺のせいだしな  
な「ありがとうなの」

葵「はあ、しようがねえ付いていつてやるよ」

まあ、暗くなるまで公園にいたのも俺のせいだしな  
な「ありがとうなの」

「」

と語り合なのはほど一緒になのはの家に来たわけだが

これ仮闇を開けよつとしたら向こうから開いた

そして、中から黒い髪をしたイケメンな男の人が出てきて

「なのは、こんな遅くまでどこに行つてた？心配したんだぞ、後君  
がなのはをつれ回したのか？」

と殺氣を飛ばしながら尋ねてきた

な「お、お兄ちやん！葵くんは、何にも悪く・・・」

「なのはは黙つてろ！」

ぶちつ

俺の中で何かが切れた気がした

葵「おい、俺お前なのはの兄なんだつてな、名前を教える」

「そんなことばっかりでここから、質問に答へろ！」

葵「うるせえ、名前を教えろ！」

と俺が低い声でいった

「うひ、俺の名前は高町恭也だ、君の名前は？」

葵「俺の名前は朝霧葵だ、わたくしの質問に対しても、もしなのは  
をつれ回したのが俺だったりひとつするんだ？」

「

と俺が挑発すると

恭「もしやうなら、今後一切『俺たち』のなのはに近づくなー。」

葵「・・・ふざけんな」

恭「なー?」

葵「ふざけんなって言つたんだよー!なにが『俺たち』のなのはだ!  
そのなのはがどんな気持ちでいたと思つてはいる!  
まだ幼いこいつが、『良い子にしなきゃいけない』つていつたんだ  
ぞ!一番家族に甘えたい時期の子供が自分の気持ちを押し殺して  
のに、友達までなのはから奪つ氣でいるのかー!」

恭「んなつー俺たちの」とを何も知らないでわかつたような口を言  
うな!」

葵「ああ、俺はお前たちの事はほとんど知らないな、だが自分の家  
族のことをほつたらかしの奴らのことなんか知りたくないな」

恭「い、いや俺たちはなのはのことをほつてなんかいな「ふざけ  
んな」つー?」

葵「ふざけんなよ・・・なのはは泣いてたぞ、一人ぼっちで公園で  
泣いてたんだぞ・・・それでもお前はいやどうせずっときてんだけ  
ど?」

なのはの他の家族もまあ、そのままでいいがお前たちに一つ聞きた  
い、お前たちはなのはとお店どっちが大切なんだ?」

恭「そ、それはもちろん「なのはです！」！」

俺が一つ質問をしたら恭也が答える前になのはの家族が出てきた

な「お母さん！」

葵「お前がなのはの母親か・・・おい今なのはと店でなのはの方が大切って答えたな？ならなぜなのはを一人にさせた！」

「それは・・・なのはも大切だけど、店も大切だつたから・・・」

葵「確かに店が大切なわかる、店がなくなつたらなのは達にご飯を食べさせてやれなくなるしな、だけど、それでもなのはをずっと一人にさせたのは間違いじやないのか？」

「はい、わ、私達が間違つてたのは悪かつたと思つてます・・・ごめんなさい」

葵「はあ、俺にじやないだる謝るのは」

「そつですね、なのは今まで一人にさせて『ごめんなさい』、これからはなるべくなのはのための時間を作るわ」

な「お、おかあさあああん」

あらあら、泣いちゃつたかそれにしても・・・なのはのためとはいえ、言い過ぎたかもな

葵「さて、俺はそろそろ帰るとしますよ」

と俺が空氣を読んで帰ろうとする

恭「ちよつと待つてくれ、一つ質問させてくれないか?」

葵「いいですよ」

恭「君はなぜなのはのいや友達のためにあんなに怒れたんだ?」

葵「・・・これは俺の血口満足かもしませんが、もう誰かが泣いてるところを見たくないんですよ、それに家族がいるのに構つてくれないなんて寂しすぎるじゃないですか」

恭「まさか、君の『家族は』

葵「いいんです、済んだことですから、だから今まで遊んでやれなかつた分なのはとたくさん遊んでくださいね、後なのはを一人にさせないでくださいね?」

恭「ああ、これからなのはを一人になんかさせないさ、後俺に・・・いや俺たちに大切なことをわからせてくれてありがとう」

葵「いえ、俺は何にもしてないですよ、では帰りますね」

と俺が帰らうとする

な「もう帰つむやつむの?」

となのはが寂しそうに聞いてきたから俺は

葵「ああ、帰るさ

でももう会えなくなるわけではないよ、たまには遊びに行くぞ、だ

からそれまでまたな

な「うん、わかつたなの絶対、絶対遊びにきてなのー」

葵「ああ、わかつたじやあまたなー。」

と俺は言いつと家に向かって歩いていった

結局俺は偽善者なのかな、いやただの罪滅ぼしなのかもな、人を助けて自分の罪を軽くしたいと思っているのかも知れないな・・・

この後家に帰った俺は、帰るのが遅かった上、アイスを買ってこなかつたせいでソラに怒られたのだった、あれ?なんか損じやないか?

子供を一人にさせるなー（後書き）

作者「さあ、本編に登場のなかつたソラちゃん」

ソ「何? ゆうか何で登場なかつたの?」

作者「えつと登場のなかつた理由ですか・・・」ダッ

ソ「いら逃げるなああ

（数分後）

ソ「はあはあ、まあいいわ、でなんだけ?」

作者「あれ何を聞こへうとしたんだ? ・・・まあいつか

ソ「あつそならそろそろ締めるわよ?」

作者「いこや~じゃあ予告して締めるか

葵「よ、今来たよ~」

作者「あつもう終わるんだけど」

葵「えつお前が言つた時間に來たんだけど」

作者「ああ~( ^ \_ ^ )」

葵「じうこひーだ?」

作者「いや、単純に葵いなくてよかつたから、早く始めひつた」

葵「マジかよ

まあ後で〇 S I 〇 K I 決定だな

作者「何故に…」

葵「眠っておひさまで来たから終わるから

作者「ああ、もう二度、じゅあ締めるやー。二つはーので

な「次回もよひじへなの～」

葵ソ作「あつ勝手に締められた」「

## 主人公紹介（ネタバレあるかも？）（前書き）

え～中途半端な時ですが、主人公に関する説明です

## 主人公紹介（ネタバレあるかも？）

主人公

名前 朝霧葵

年齢 5才

性別 男の娘？

身長 110cm 体重 21kg

容姿 星空へ架かる橋の伊吹を黒髪にして小さくした感じ

神様に転生させられた人間

自称偽善者で、困ってる人がいると放つておけない性格である。  
普段はやる気もなくとてもだらしなさそうな感じをだしているしかし、何か自分で決めたことは最後までやり遂げる人である  
偽善者（自称）になつた理由は前世での過去に何かあつたのかも知れない

また普通の人とは少し違うところが・・・？

身体能力 A+

魔力ランク A+

魔導師ランク 不明

使える技

ドラクエ、テイルズのほとんどの技

とある魔術の禁書目録の超能力から電撃使いと座標移動の能力が使える

他には今のところ金色のガッシュュベルに出てくる、呪文と答えを出す者<sup>アンサー・カーカ</sup>の能力も使える

また、前世では剣術を習っていたためか殺氣や気配に敏感である  
頭の方は、一応大学卒業できる程度の学力はある（何故一応かとい  
うと、大学を中退したから正確にはわからないから）

## 主人公紹介（ネタバレあるかも？）（後書き）

作者「」

ソ「ねえ、どうしたの彼？」

葵「ああどうやら、物語の大幅な道筋を忘れてるらしい」

ソ「・・・酷いね」

葵「しかも、この小説の大まかなあらすじを書いた紙を無くしたらしい」

ソ「ドンマイだね」

作者「復活」あああああ

葵「おおー、復活したか、で物語の流れ思い出したか」

作者「・・・」ダッ

葵「ちよつ・・・逃げやがったな」

ソ「まあ良いじゃん、さてそろそろ時間だね、さて今回こそ私が締めるよ」

葵ソ「3」

葵ソ「2」

葵ソ「」

葵ソ「ゼ・・な「また次回もよろしくなの」「んなつー」

葵ソ「一回連續で盗られた・・・。」「」

## 中途半端はダメだと思つ（前書き）

え～更新遅れていますみません、これからテストも重なるので更新が更に遅くなるかもしません  
それではどうぞ

## 中途半端はダメだと黙つ

前回のあらすじ

公園でなのはと友達に なのはの家に行つて怒り爆発 アイス買つ  
の忘れてソラに怒られる

あれ? 前回のあらすじとかいらなくね?

なのはの家族に自分の言いたいことが言えて、自己満足した次の日

ピピピッ

カチッ

葵「ふあ～よく寝たな、今日は何しようかな?」

そう、食べ物とかはソラに怒られた後にソラと一緒に買い物に行つ  
たため買う必要もなく、学校とかも行つたないためやることがそん  
なにないのだ

ソ「暇なら、アイス買つてきて~」

と俺が何しようか朝」はんを作りながら考えていると、ソファーに  
座つてテレビを見るソラに頼まれたのだ

葵「別に良いけど・・・でいうか、昨日もアイス食つただろ、だか  
ら今日はアイスは無しな」

と出来上がった料理をテーブルの上に並べながら俺が言つと

ソ「え～だつたら、アイスじゃなくて良～から何か甘い物買つきてよ～」

とソファーからテーブルに移動しながら、甘い物を欲求してくるの  
だつた

葵「じんだけ甘い物が欲しいんだよ」

と俺が呆れないと

ソ「だつて甘い物は女の子大好物でしょ」「

と朝～はんを食いながら、嬉しそうに言つてきたのだつた

葵「わかつたよ・・・じゃあ朝～はん食つたら、買ひにいってくる  
よ」

ソ「え～一緒に行こいつよ～」

葵「う～ん、わかつたじゃあ、早く～はん食べやまおひぎ」

朝～はんを食べた俺はじ～に行こいつか迷ついていた  
だいたい俺はこの辺の地理を知らないでどうするかな?  
と俺が考えていたら

ソ「ねえ、いく場所決まってないなら、翠屋に行かない?」

とソラが服を着替えながら聞いてきた

葵「翠屋つて、おい！服着替えるなら自分の部屋で着替えろー。」

とコジングで着替えてたソラを部屋の中で着替えさせながら

葵「翠屋かあの店なら甘い物あるだろ？な・・・よし翠屋にするか」

(しかしじどりかで聞いたことのある店だな)

と翠屋に向かつた俺たちだが・・・

葵「・・・そういうえば、翠屋つてどつかで聞いたことあると思つて  
いたら、翠屋つてなのはの家族の店だったな・・・どつしょ、すつ  
いぐへ帰りたくなってきた」

そう、俺は誰かを助けたりして自己満足したりするのはいいがなる  
べく面倒な事は避けたいたちなのだ、だからこの前いろいろ有つた  
ばかりで会うのは少し嫌だから帰りたいのだ、しかしそんな俺の考  
えなんか甘い物に目がないソラには関係なく・・・

ソ「おつ邪魔します」ケーキ食べに来ました~」

と勝手に入つて行つたのだ

葵「はあ、しょうがない俺も入るとするか」

葵「失礼します～俺もその子の付き添いで来ました～」

恭「はい、いらっしゃいまつー！」

～ 恭也 si de o ut～

最初に女の子が入つて来たかと思つたら、すぐに男の娘（？）が入つて來たどつかで見たことのある顔だと思つたら、入つて來た男の子はこの前の子だったのだ、俺は驚いてしつかり挨拶をすることが出来なかつた・・・

～ 恭也 si de o ut～

あちや～せつぱり驚いてるな、まあ関係ないけど

ソ「あの～私たちじこに座つたら良いのかな？」

ヒソワガ言つと

恭「はつーし、失礼しましたお席はこちりです」

と驚いて動きの止まつていた、恭也さんがソラの言葉に気づいて俺達を席まで案内してくれた

ソ「さて、まずは何を頼もうかな～」

葵「おいおい、『まあま』つていつたい何個頼むきだよ・・・

ソ「え～だつてここのケーキつてすつぐく美味しいらしいだよ、だから沢山食べたいな～って、ダメかな？」

葵「はあ、まあいいけどな」

ソ「やつた、じゃあこれにてさせないかしら……」

と俺達が話していくと

恭「少しいいかな?」

ところの間にか近くにいた恭ちゃんが俺に話しかけてきた

葵「いいですけど……何か?」

恭「いや、この前は大切な事を俺に想いで語ってくれてあつがひとつ  
と思つてな」

・・・あれは俺の血口満足なんだけどな

葵「よしてください・・・あれは僕の血口満足ですか?」

恭「それでも俺は再度お礼が言いたかったんだ、それになのはと友  
達になつてくれたのは同情や血口満足のためじゃないだろ?」

葵「そうかもしませんが、やつじやないかもしませんよ?」

恭「それでも、なのはと『友達になつた』ところの事実だけは変わら  
ないだろ?」

葵「それはそうですがね」

恭「だから、改めてお礼を申すよ、あつがとい」

葵「もうなのはを・・・誰か一人にさせないでくださいよ。」

恭「ああ、当たり前を・・・むし時間を取りせたな、よし今日は家の店のケーキをじて走するよ、もちろんタダでね」

とケーキをじて走すると急に前に出した恭也さん、それは悪いと思つて

葵「ええつそんことしなくてもいいですよ」

と俺が断らうとしたが

恭「母ちゃんの前の子に店のケーキをじて走しようと思つんだけどいいかな?」

と恭也さんなんと俺を無視しやがつた

桃「良いわね~お母さんも賛成だわ~」

葵「いやだから、そんな悪い「いいんじゃないの」って人が断らうとしてるのに誰ですか!」

と俺が恭也さんと桃子さんの誘いを断らうとしたが俺の言葉を遮りながら、店の奥から女人が出てきた

「じゃあ、葵くん」

と言つて俺に手を差しのべてきた

葵 - こんじあほ、えいと・・・」

「あつまだ名前を言ってなかつたね、私の名前は高町美由希これかうよろしくね」

葵「あつはい、よろしくお願ひします」

なるほど、あの時ドアの近くにいた気配はこの人だつたのか

桃一「じゃあ何にする？」

じじいやらもう断る事出来そうになくなつていた

葵一はあ、じゃあお願いしますよ、注文は「私も頼んで良い?」うおっ!ソラいたのか?」

そうソラが空気過ぎですつかり忘れていたのだ

ソーフンだ、良いもん空氣でも別に

葵 はあ、そう機嫌悪くすんな・・・あつ桃子さん注文良いですか

?

桃「良いわよ」

葵「じゃあ俺はシートケーキとコーヒーでソラは何にするんだ？」

ソ「じゃあ私は、チヨノノートケーキとショークリームとチーズケーキと紅茶にするね」

葵「よく食べるな・・・すいません桃子ちゃん連れが、沢山頼んで」

桃「別にそのへりこ良いわよ ジヤア、注文はそれでいいかしら?」

葵「はい、お願ひします」

と俺達の注文を聞いた桃子ちゃんは店の奥に行ってしまった

葵「恭也さん、なのはせじこるんですか?」

そう実は店に入つてから一回もなのはを見ていないのだ

恭「ああ、なのはなら・・・お~いなのはせじょと出してくれ~」

と恭也さんが店の奥に向かつてなのはを呼ぶと奥からツインテールの女の子が出てきた、そつなのはが出てきたのだ

な「な~~お兄ちゃん!~」店の奥から出てきたなのはは俺の方を見た瞬間固まつてしまつた・・・一体どうしたんだ?

葵「お~い、なのはせじつた~あおいく~ん」ガハッ

急に固まつてしまつたなのはを心配した俺だが心配は無用だつたようだ何故なら、急に俺の名前を呼びながらタックルをかまってきたからだ

葵「イタタ、お~いなのは何でタックルしてきたんだ?」

とタックルをしてきたなのはを引き離しながら、タックルの理由を聞いてみた

な「私、葵くんに会えて嬉しかったから、ついそれに・・・//」

葵「それにどうしたんだ? ていうか顔が赤いけど風邪か? 大丈夫じゃないなら無理すんなよ」

そつ急になのはは顔を赤くしたのだ、風邪じゃなかつたら良いけどな「・・・葵くんのバカ」

な、何故だ何故心配してバカにされなきやいかんのだ  
後ろで恭也さんが冷たい視線を浴びさせてくるし、ソラになんか黒いオーラ見たいのが見えるし

ソ「あなたがなのはさん? 私は朝霧ソラ、よろしくね? 後『私の葵に何で抱き着いて来たのかしら?』

何だと・・・今のタックルが抱き着いて來たよつにソラには見えたのか? ていうかオーラ怖いな

葵「ソラ、俺はお前の物じゃないぞ? 後その黒いオーラ見たいの隠せ、恭也さんが後ろで少しひびつてるぞ」

そういうのオーラが徐々に強くなつてきたせいで、恭也さんが少しひびつてるのだ

な「ううなの、それに葵くんは私の物なの~

葵「なのは、お前も違うぞ、俺は誰の物でもないぞ? 後、目だけ笑つてないから少し怖いぞ?」

そつのははなのはで顔は笑つてゐる」と田のハイライトが消えてる  
せいで、少しではなくて凄く怖いのだ

ソ「葵ハ、ワタシナンダカラ、アナタハ葵ニクツツカナイテネ?」

な「ソツチ、コソワタシノ葵くんニクツツカナイテナノ」

言葉が片言なのと二人のオーラのせいで、恐すぎる・・・

恭也さん助けて

と俺は恭也さんの方を見たが

恭「そんな俺達のなのはがあんなんになつてしまつたなんて・・・  
○ーン

と落ち込んでいた、役立たない恭也さん

かでこの状況どうしようかな・・・ヤバい考えつかねえ  
と俺が考えいたら

桃「はーい、お待ちどうさま〜」注文の品ですよ〜後なのはにもね

「

すげえ、桃子さんがきた瞬間にオーラが消えたぞ、ケーキが凄いのか桃子さんが凄いのかわからんが、桃子さんグッジョブだぜ

葵「じゃあ、ケーキもきたようだし、食べよ!せー」

ソ「うん、わかった」

な「私もわかつたなの」

葵「じゃあ」「こつただきます~」「」「」

とケーキを食べ始めた俺はなのはに『氣』になつてた事を聞いてみた

葵「なのは、昨日の今田だけ一人になつてないか?」

な「なつてないなの」

とここにこしながら言つて来た、びひやら恭也さん達は約束を守つてくれたみたいだな

葵「じゃあ、今は家族で過いせし幸せか?なのは」

な「うん・・・だけどまだお父さんが入院してるから少し寂しいな  
の・・・」

と少し寂しそうな顔をしながら言つて来た

恭「なのは・・・」

そんなんのはの言葉を聞いた恭也さん達も寂しそうな顔していた

葵「そうか・・・早くお父さんが退院するといいな」

な「・・・うん」

恭「・・・うだな」

やつぱり返事をしたなのはと恭也さんは本当に寂しそうだった

葵ソ「「」馳走様でした～」」

桃「また、来てね～」

な「またきてなの～」

恭「・・・またな」

美「またね～」

とケーキに食べ終わった俺達はそのままの家族に見送られながら、店を後にした

このまま、帰るうとしたが土郎さんについての話をした時のは達の顔が忘れられず

葵「・・・ソラ帰りに少し寄り道したいんだが、いいか?」

ソ「いいよ、葵のやりたい事なんかわかつてゐからね、どうせせり高町さん達のお父さんをどうとかしておもつてゐるんでしょう?」

葵「まさか驚いたな、俺のやうつとしてることがわかるなんてな

ソ「まあ、何て言つたつて私は葵のデバイスですから」

葵「俺のデバイスだからって言つのは関係ないだろ、しかし士郎さんは何処に入院してるんだ?」

そう、士郎さんが何処に入院してるかを俺は知らないのだ

ソ「そうね、何処に入院してのかしら・・・」

葵「うーん、俺の能力じゃさすがに何処にいるのかはわからんしな。  
・  
・  
・」

そう、俺が持つてる能力は超能力少しと魔法くらいなのだ  
・  
・

ん?また俺が頼んだ能力って魔法だけか?

葵「あつ!」

ソ「どうしたの?」

葵「そいいえば忘れてた、俺『答えを出す者』の能力を持つてるんだつた」

ソ「そうなの?ていうかその能力って何?」

葵「確かに、全ての事の答えがわかるとかいう能力のはずだ」

ソ「じゃあ、その能力で」

葵「そう、士郎の入院してゐる病院に行けばいいんだ」

ソ「じゃあ、早くい」  
「

「移動中～

さて、今俺は士郎さんの病室前にいる、えつ飛ばし過ぎだつて？そんなのは作者に言え

葵「さて、入るか」

ソ「そうね」

と一人で病室に入ったわけだが

葵「つーこれは酷いな」

そう病室を入つた俺達を待つてゐたのは身体中に包帯を巻いて、点滴に繋がれた士郎さんだった

ソ「そうね、身体中にダメージを負つてるわ、一体何をしたらいこうなるのかな」

葵「・・・あの時と同じだ・・・」

ソ「葵？どうしたの？大丈夫？大丈夫じゃないなら一回出直さない？」

そつ余りの酷さに俺は、精神的に来てしまったのだ・・・

葵「ああ、だ、大丈夫だ俺は早くなのは達の悲しみを取り扱うんだ」  
そつ自分いい聞かせながら、俺は精神を落ち着かせると早速、怪我を治すために色々考え始めた

葵「さて、どうするかな、ただ体力と怪我を治すなら回復魔法をかければいいが、おそらく内臓も弱つてゐるだろうな」

それにして、物凄い生命力だな  
よっぽど家族と別れたくないんだろうな

葵「仕方ない、俺の魔力と少しの生命力を混ぜて、完全に治すための魔法を創るか」

ソ「生命力を混ぜるはダメ！もしかしたら、間違えて生命力をほどんど使つてしまつたら死んじゃつ」

葵「大丈夫、俺はまだまだやることがたくさんあるんだ、こんなところじや死なねえよ」

そうさ、まだ物語は始まつてもいないのにたつた一人救うのに、迷うものか

葵「いくぜ、我に流れる生命の源を媒体にしてかの者に力与えん、完全回復呪文、『ライフ・ギフト』！」

と俺が呪文を唱えると土郎さんに向かつて、優しい光が俺から流れ

た、そして光が流れ終わると

「ん、いいは・・・」

と土郎さんが目覚めた、良かつた成功したみたいだな

葵「気分はどうですか？」

と俺は目が覚めたばかりの土郎さんに体の具合を聞いてみた

## 中途半端はダメだと呟つ（後書き）

作者「さて、今回の話は次回のために書いたんだよね」

ソ「そうなの？」

作者「うん、そうだねだから結構考えただけどね」

葵「その割には相変わらず文章は酷いけどな」

作者「グサツ」

ソ「しかも、なんか無理矢理感、満載だしね」

作者「グサツグサツ」

な「そんなに言わなくともいいかもなの」

作者「おお、」  
「天使が」

な「確かにノロマで酷い文でペース配分も出来ないダメ作者さんだけど・・・」

作者「君の言葉に一番傷ついたよー！」

な「ううなの？まあ別にどうでもいいなの」

葵ソ「「確かにどうでもこーしな（ね）」「

作者「あれ?なんか皆からの扱いが酷い気が・・・」

な「気のせいなの、あつーそろそろ時間なので、いつせーので!」

葵ソな作「「「また次回も宜しくな(ね)(なの)( )」「」」

## ばれた力は秘密（前書き）

今さらですか、誤字や脱字またキャラ達の話かたがおかしかつたら  
感想で言つてくださいお願ひします、ではどうぞ

## ばれた力は秘密

（土郎 side）

土「ん、ここは・・・」

僕が目を覚ますと、知らない部屋にいた服や腕に刺さっている点滴を見るに病院のようだと自分の状態を確認していたら

「気分はどうですか？」

と僕の寝ていたベッドの隣にいた、僕の知らないまだ幼い女の子に話しかけられた

（土郎 side out）

あれ？ 反応がないな・・・大丈夫か？

葵「あの～大丈夫ですか？」

「ああ、すまないとこりで君は誰かな？」

（こつちは知ってるのに向こつちは知らないって結構やりにくいいな

葵「僕はなのはの友達の朝霧葵です、よろしくお願ひします」

「へ～なのはの友達か、僕の名前は高町士郎、なのはの父親だよろしくね、葵くん」

葵「とにかく、体の調子はどうですか？」

そう田が覚めたのは良いが、体の調子が気になるのだ

士「ああ、なんとも……！」

葵「突然驚いた顔をしてどうしました？」

士「いや、僕の体の調子はすごく良好だよ、怪我もないしねだけどそれがおかしいんだよ、僕は確か大怪我をしたはずなのに傷跡さえなくなつて完治してることが」

・・・驚いたな、こんなに不自然な点を上げれるなんてな

葵「そうですか、傷跡がなくて良かつたですね、じゃあ僕はこれで」と何か聞かれる前に帰らとしたが

ガシッと腕を捕まれ

士「もしかして、君が僕を助けてくれたのか？」

と力強い瞳で聞かれてしまつた、このままでは帰してくれなさそう  
だな・・・

葵「はあ、しようがないですねこのまま訳がわからないままのは  
気持ち悪いでしょだから、説明しますよ」

葵「まあまじいから話ましょーつか?」

士「そうだね、まずは君の正体からかな?」

ぐついたり答へずらい質問だな、しょうがない真実と嘘を織り混ぜて話すかな

葵「僕の正体からですか、わかりました話ましょー、僕は魔導師ですね」

士「魔導師? 聞いたこともないな・・・もしかして君は地球の人間じゃないのか?」

まあ、普通聞いたこともないだろうな

葵「いいえ、地球の人間ですよ、ただ少し色々あって魔導師になつたんですよ」

神様に転生させてもらつたなんて信じられないだらうからこんなもんだろ

士「どうか、その色々については教えては・・・くれないだらうね  
葵「すみません」

士「こやこや別ここで、といひで僕の体を治つたのは君のお陰かい?」

葵「そうですね、僕の魔法の力で治しました」

葵「そうかい、ありがと僕の体を治してくれて、すまないね時間  
をとらせた」

葵「いえいえ、とにかく一つ質問いいですか？」

そつ一つ気になってる事があるのだ

士「なんだい？僕に答える範囲内だつたら答えるよ  
「ねー

葵「じゃあ聞きます、何であなたはこんな意識が無くなるほどの大  
怪我をしたんですか？」

士「そうだね・・・今から言ひ事は他言無用だからでいいかい？」

葵「はい」

士「実は僕は裏の仕事で護衛とかをやつしていくね、そこでやつてしまつてね・・・」

そうか、士郎さんの尋常じゃない隙の無むむと雰囲気はそのせいか。  
・・だけど

葵「なぜ怪我をしたかわかりました、一つ言いますもう裏の仕事  
は、いえ裏の社会とは関わらないでください、そして家族をもう悲  
しませないでください」

何を思われたつて構わない、これでまだ裏の仕事を続けるつて言つ  
なら、何をしても止めるつもりだ

士「あの仕事は続けるつもりはないよ、今回の事でもつづつ  
たよ、それにもう家族を悲しませたくないしね

良かった、これで俺のやりたい事は一旦終わったな

葵「良かった、では僕はそろそろ帰りますね」

と俺が帰らとしたが

士「待つてくれ」

と俺が帰らうとするのを止めてきた

葵「何ですか？」

士「最後に一ついいかい？」

葵「いいですよ」

さて、なんだらう

士「君はどうしてそこまで誰かの為に一生懸命なれるんだ」

・・・

葵「何で誰かの為に一生懸命になれるかですって？・・・それは、  
僕が偽善者だからですよ」

と黙つて僕はソラと一緒に病室を後退した

（土郎 side）

最後の葵くんの日はどこか悲しい表情をしていた、まだ小さな子供  
なのになんな表情ができるなんて・・・一体あの子は何を抱えてい  
るのだろうか・・・

ばれた力は秘密（後書き）

作「いや～今日は葵と土郎さんの話でした」

ソ「・・・そうだね」

葵「ん～どうしたソラ、元気ないな？」

ソ「だつて・・・私の出番がなかつたんだもん！」

葵「知らん、そんなのダメ作者に聞け」

作「ダメ言つたダメって、傷つくだろ」

ソ「そんなことよつ、何で私の出番なかつたの？」

作「え、えっとその・・・」

葵「まさか、ソラの事忘れてたりしてなどかな

作「ギクッ」

葵「えつ、マジで？」

作「マジだよ」

ソ「フフフ、私を忘れるなんて覚悟出来てるのかな？かな？」

作「う、めんなさい」ガクガク（。・。）

葵「ちよつ色々危ないから早くその鉈をしまえ」

ソ「全く……許してあげるから、次回出番増やしなやこみ」

作「た、助かった～ありがと」  
「葵」

葵「まあな、さすがに俺も少し怖かつたしな」

作「そりだな、わたくしの縛めるか」

ソ「やうねじやあ、また次回会こましよつね～」

葵「また次回な～」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6945x/>

---

とあるリリカルな転生者

2011年11月24日22時51分発行